

令和 6 年 5 月 24 日現在

機関番号：33908

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12284

研究課題名（和文）中世禅林における黄山谷詩解釈史研究 五山版書入れと漢文抄との比較検討から

研究課題名（英文）Research on the history of interpretation of Hang Shangu's poems in medieval Zen forests:By comparing on interliner glosses in Gozan Editions with Cinitic Commentaries

研究代表者

大島 絵莉香 (Oshima, Erika)

中京大学・グローバル教育センター・外国語囑託講師

研究者番号：30761746

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本中世禅林における中国北宋・黄山谷詩の研究対象となる年代を、日本で作られた黄山谷詩の解説書、抄物の成立以前にまで押し広げようとする試みである。西尾市岩瀬文庫蔵『山谷詩集注』の書入れにみえる禅僧が、現存する黄山谷詩抄物の編者よりも前の世代に限られることに着目し、現存する黄山谷詩の抄物と照合することで、黄山谷詩抄物の特徴を導き出すことに成功した。そのほか、黄山谷詩抄物における「演雅」詩の訓読・解釈の独自性を明らかにした。また、黄山谷詩抄物にみえる、北宋の詩人の高荷の逸詩を発見した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでに五山版の書入れをとりあげたり、書入れを抄物と照合する先行研究はあった。しかし本研究が五山版にみえる書入れの説者が現存する抄物の編者よりも前の世代に限られることに着目し、現存する抄物との比較照合を通して抄物成立以前の説の継承・展開を明らかにしたことは初の試みである。この方法を用いることができるか否かは、書入れにみえる禅僧ら説者の年代に依拠するものの、他の抄物においても流用できる可能性がある点において学術的意義を有している。

研究成果の概要（英文）：This research is focusing on the fact that the Japanese Zen monks seen in the interliner glosses in the "Shangu Shi Jizhu" held by Iwase Bunko Library in Nishio(hereafter Iwase version) were limited to the generation before the editors of the extant Sinitic commentaries on the poems of Huang Tingjian(1045-1105, hao Shangu, hereafter Shangu). By comparing the interliner glosses in the Iwase version with existing Sinitic commentaries, I succeeded in deducing the characteristics of Sinitic commentaries on the poems of Shangu.

In addition, It was clarified the uniqueness of the native Japanese reading and interpretation of "enya" poems in Sinitic commentaries on the poems of Shangu. I discovered a poems by the Northern Sung Gao He in Sinitic commentaries on the poems of Shangu.

研究分野：五山文学

キーワード：黄山谷 五山版 中世禅林 万里集九 黄庭堅 抄物 高荷 月舟寿桂

1. 研究開始当初の背景

申請者は、本邦の中世禅林における、北宋・黄庭堅(号は山谷道人。以下、山谷と称す)詩研究史の継承と展開の解明を想定している。

山谷は禅林で最も詩の読まれた中国詩人の1人であり、その詩は応仁の乱前後に流行し、その後山谷の詩集『山谷詩集注』を底本とした解説書、抄物が編まれた。抄物は、主にカナで書かれたカナ抄と主に漢文で書かれた漢文抄とに大別可能である。

芳賀幸四郎氏が『東山文化の研究』(河出書房、1945年)によって、抄物研究の基礎を固めたのは、研究環境の厳しい第二次世界大戦前後のことであった。しかし、それ以来抄物研究全体の傾向として、カナ抄は国語学的な知見からの研究が進む一方、漢文抄の研究はあまり進捗がない。これは、幸運にも関連しあう三抄本が揃って現存している山谷詩漢文抄も例外ではない。山谷詩漢文抄には成立の早いものから、万里集九(1428~?)『帳中香』、月舟寿桂(?~1533、別号は幻雲)『山谷幻雲抄』(以下『幻雲抄』と略す)、さらにこの前者から十中八九、後者から余すところなく抄出したと、編者・彭叔守仙(1490~1555)が跋文(彭叔の別集『猶如昨夢集』所収)で述べた『山谷詩集注』(市立米沢図書館蔵、以下『米沢抄』と略す)の計三本がある。しかしながら、これら抄出関係のある山谷詩三漢文抄だけをもってしても、山谷詩漢文抄における継承関係の全体像は把握できない。まず、三漢文抄を照合しても、彭叔『米沢抄』には万里『帳中香』と月舟『幻雲抄』にはない禅僧の説が散見されることで、彭叔の手元には『帳中香』と『幻雲抄』以外に参照したものがあつたと推定されるためである。次に、万里『帳中香』は現存する中でも最古の山谷詩漢文抄であるが、万里とそれ以前の説の区別がつきにくい記述となっており、優れた説があつてもどこからが『帳中香』の新説であるかが判然としないためである。

山谷詩漢文抄における前掲の問題を解決するため、申請者は西尾市岩瀬文庫蔵五山版『山谷詩集注』(以下、岩瀬本と称す)書入れにみえる説者が、現存する最古の山谷詩抄物『帳中香』編者である万里集九よりも年代が上の禅僧のものに限られることに着目し、本研究を計画した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中世禅林の山谷詩漢文抄における説の継承・展開の様相を抄物成立以前にさかのぼってより広く明示することにある。具体的には、五山版書入れにおける禅僧の説と漢文抄である万里『帳中香』・月舟『幻雲抄』・彭叔『米沢抄』との関係を明らかにすること、五山版における書入れに散見する「口義」と、抄物である『黄氏口義』との関連の有無を明らかにすること、五山版の書入れに漢文抄に確認できない禅僧がいれば、その禅僧を特定することを踏まえたうえで、注釈者ごとの解釈方法・内容の違いを明らかにすることである。なお、の『黄氏口義』とは、戦国時代の民間の学者、林宗二(1498~1581)による山谷詩カナ抄である。問題は、書入れの「口義」が一般名詞としての口伝を意味するのか、『黄氏口義』を指すのかという点にある。

また、山谷詩漢文抄にみえる、特筆すべき解釈や漢籍からの引用については別稿を起すことにする。

3. 研究の方法

本項及び次項では、申請者がおこなった(1)山谷詩漢文抄と五山版書入れに関する研究、(2)山谷詩漢文抄における詩の解釈に関する研究、(3)山谷詩漢文抄にみえる逸詩の研究に分けて述べたい。

(1)山谷詩漢文抄と五山版書入れに関する研究

まずは岩瀬本のほか、川瀬一馬氏が『五山版の研究』(日本古書籍商協会、1970年)で、書入れの多い山谷詩五山版としてとりあげた、『山谷黄先生大全詩註』の穂久邇文庫蔵本(以下、穂久邇本と略す)、『山谷詩集注』の東洋文庫蔵本(以下、東洋本と略す)・大東急記念文庫蔵本(以下、大東急本と略す)のうち、非公開である穂久邇本以外を調査し、現存する山谷詩漢文抄の成立以前の書入れと思しき本を洗い出した(岩瀬本については後述する)。

まず、東洋本は川瀬氏が述べるように書入れ自体は多いものの、むしろ『山谷詩集注』の任淵注が引用する漢詩文に対して出典を記録する目的での書入れが多くを占めており、禅僧の説は稀に見えるのみである。次に、大東急本は『米沢抄』編者である彭叔が持ち主であったこともあり、彭叔が『米沢抄』を編むうえで参照したという『帳中香』『幻雲抄』になく、『米沢抄』にみえる説も発見された。中には『帳中香』からの引用も確認できたことから、書入れ時期が『帳中香』よりも後であることを示しているものの、大東急本には複数人の手による書入れが多数あることから、『帳中香』からの書入れがあつたとしても、『帳中香』の成立以降であると推測されるのは、当該の書入れ及びその手の書入れに限るとしか言いようがなく、やはり書入れ時期の特定は困難である。

一方で、岩瀬本を調査したところ、巻1~6にかけて『帳中香』や『幻雲抄』ではお馴染みの惟肖得巖(1360~1437)・心田清播(1375~1447)・瑞溪周鳳(1392~1473)・希世靈彦(1403~1488)、蘭坡景菴(1417~1501)の説があった。彼らはいずれも、現存する最古の山谷詩漢文抄である『帳中香』編者・万里(1428~?)よりも先に活躍した禅僧である。また、岩瀬本の「愚按」と冠する説は『帳中香』には「先輩」の説であること、岩瀬本の「口義」と冠する説が、『幻雲抄』(すなわち岩瀬本にみえる「口義」は、『帳中香』編者である万里よりも後世の林宗二による『黄氏口義』ではないことを示している)。以上のことから、岩瀬本の書入れを現存する山谷詩漢文抄が成立する以前の“準抄物”と定義し、『帳中香』・『幻雲抄』・『米沢抄』との比較検討を行い、各抄物との重複具合を調査し、各説の検討をおこなった。

(2) 山谷詩漢文抄における詩の解釈に関する研究

山谷の「演雅」詩は、全40句の七言古詩である。同詩は、冒頭から第38句まで、漢代の辞書かつ経書である『爾雅』の小動物を敷衍した叙述が続き、第39・40句は「江南野水碧於天、中有白鷗閑似我」という異質な句で締めくくられている。「演雅」詩は一詩単独でカナ抄が存在しており、中国のみならず日本でも模倣されたことから注目度の高い作品であったことがうかがえる。

さて、抄物というのは、先人及び編者の説の積み重ねからなる、所謂“集注”注の集まりであることから、詩の構造に関する分析と解釈とが、結びつかないという弱点がある。しかしながら山谷詩抄物の中でも、『帳中香』における「演雅」抄文は、詩の構造を分析し、それを踏まえた訓読・解釈をしており、当時の詩の解釈方法を知るための好例であると言える。

申請者はまず、卞東坡氏が先行研究でとりあげた『幻雲抄』における「演雅」詩評価のほか、『帳中香』にみえる「演雅」詩評価を分析した。さらにそれを踏まえて『帳中香』にみえる「演雅」詩の第39・40句「江南野水碧於天、中有白鷗閑似我」の訓読と解釈を分析し、その妥当性と位置づけについて検討を加えた。

(3) 山谷詩漢文抄にみえる逸詩の研究

山谷を詩の祖とする江西詩派の最後の1人とされている人物に、生没年未詳の高荷(号は還々先生)がいる。高荷は詳しい事績が伝わらず、詩は7首と断句8種が現存するのみであったが、申請者が『幻雲抄』において、高荷詩集『還々先生詩集』十卷(散佚)からの、高荷の逸詩二十三首(重複を除く)の引用を発見した。

まず『幻雲抄』にみえる、月舟当時の高荷(逸)詩の流通状況と月舟が『還々先生詩集』を入手したとする記述をとりあげ、続いて高荷逸詩の詩型を分析し、高荷逸詩の引用に伴われる『還々先生詩集』の巻数と併せて、同書の詩の配列について検討を加えた。

4. 研究成果

(1) 山谷詩漢文抄と五山版書入れに関する研究

まず、岩瀬本書入れと山谷詩漢文抄を照合した結果、『帳中香』とは一致率が低く、『幻雲抄』とは高いことが明らかにした。

さらに江西詩派の句法に関する説と、『山谷詩集注』の任淵注(後述)の訓を否定する説をとりあげて、『帳中香』・『幻雲抄』と照合しながら内容を検討し、以下の結果を得た。

について岩瀬本では、瑞溪(前掲)が山谷の「答外舅孫莘老」(外舅孫莘老に和して答ふ)詩第一聯「西風挽不来、残暑推不去」(西風、挽けども来たらず、残暑、推せども去らず。)に対して「江西句法」と定義したことに対し、『幻雲抄』にみえる説は岩瀬本と僅かな異同がある一方で、『帳中香』にある同説が、岩瀬本や『幻雲抄』と比較すると、説明がより詳細になっていること、さらにまた、岩瀬本及び『幻雲抄』にみえる説が、『帳中香』で発展している例が他にもあることを指摘した。

続いてで主にとりあげたのは、山谷「寄裴仲謨」(裴仲謨に寄す)詩の第十三句「念公篤行李」の「篤行李」に対する『山谷詩集注』の任淵注を否定する説である。岩瀬本の「或」(ある人)の説が示す、惟肖も同意する解釈を山谷漢文抄と比較すると、『帳中香』は漢代及び六朝時代の類似用例を引用して補強しており、一方の『幻雲抄』も岩瀬本の説に賛同しつつ別の視点からの説を加えていることを指摘した。

以上のように、岩瀬本と山谷詩漢文抄を照合して各漢文抄の特徴を明らかにしたほか、では現在の中国文学の研究でも通用する、山谷詩の妥当な訓読・解釈を提示した。

(2) 山谷詩漢文抄における詩の解釈に関する研究

まず、『帳中香』とその後続の山谷詩漢文抄が、「演雅」詩全四十句のうち、各句に小動物を読み込んだ第1~38句の対句の連続に対して、人間世界への諷諭性を見出していることを指摘し、さらに異質の最終聯第39・40句「江南野水碧於天、中有白鷗閑似我」との間に、意味上の断絶を見出していたことを指摘した。

次に、『帳中香』が一見対体とは看做せない、「演雅」詩第39・40句「江南野水碧於天、中有白鷗閑似我」を対句と看做したことについて、『帳中香』編者である万里集九が最終聯を流水対 対応する品詞が合わずとも、上句と下句との間に因果関係を見出すことが可能である、特殊

な対 と看做した可能性があること、またその背景に万里集九が当時本邦に伝わっていた盛唐・杜甫の詩(山谷は杜甫を詩作の見本としていた)の注釈を参照して山谷詩の分析に流用した可能性を指摘した。さらに、『帳中香』が、「演雅」詩の第40句を「中有_レ白鷗閑似_レ我」(中に白鷗の閑なること我に似たる有り)とする訓読を優れたものと看做し、我を閑たる鷗を同一視して解釈したのは、第四十句「碧於天」(天よりも碧く)に対する一般的な対句として対応に「閑_レ似_レ我」(我よりも閑なり)と訓読するのを避けた可能性があることを指摘した。

また、「演雅」全体の構造と解釈とを結び付けてみると、『帳中香』が最終聯39・40句に見出した、白鷗と同一になる閑たる解放感は、その直前までの第1～38句まで連綿と続いた厳密な、諷諭性と重苦しさを伴う対句の連続から、最終聯の自由度の高い対句、流水対への一変に、効果的に裏打ちされたものであり、『帳中香』におけるこの構造分析及び解釈は中国文学側の山谷詩研究史においても独自性があることを提示した。

(3) 山谷詩漢文抄にみえる逸詩の研究

まず、『幻雲抄』にみえる叙述から、15世紀半ば頃には高荷の詩集(ただし『還々先生詩集』かは未詳)が本邦に伝わっていたこと、月舟が入手した『還々先生詩集』(散佚)が南宋・黄汝嘉による江西詩派本(江西詩派の別集の増刻・重刻)と同じ特徴をもっていたことを述べた(ただし刊記がないため詳細は不明)。

続いて、高荷逸詩を分析して詩型を古体詩と新体詩とに分類し、高荷逸詩の引用に伴われる『還々先生詩集』(散佚)の引用巻数ごとに整理した結果、『還々先生詩集』の詩の配列が、古体詩 近体詩の順である、詩体別であったことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大島絵莉香	4. 巻 17
2. 論文標題 黄山谷詩抄物「演雅」の解釈について—万里集九『帳中香』を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本漢文学研究	6. 最初と最後の頁 41～59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島絵莉香	4. 巻 72
2. 論文標題 西尾市岩瀬文庫蔵五山版『山谷詩集注』書入れについて 黄山谷詩漢文抄との関わりから	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本中国学会報	6. 最初と最後の頁 176～190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島絵莉香	4. 巻 10
2. 論文標題 建仁寺両足院蔵月舟寿桂『山谷幻雲抄』所引高荷逸詩について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本宋代文学学会報	6. 最初と最後の頁 100～140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 大島絵莉香
2. 発表標題 山谷詩在日本禅林接受の情況 以山谷詩漢文抄中の文学術語“味外味”為例
3. 学会等名 “從中古到近代: 写本文化与跨文化交流” 國際學術檢討会（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大島絵莉香
2. 発表標題 西尾市岩瀬文庫蔵五山版『山谷詩集注』における書き入れについて 黄山谷詩漢文抄との関わりから
3. 学会等名 日本宋代文学学会 第5回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------